

2009年6月28日勉強会議事録

プラトン『国家』

発表者：中山（一卷～二巻）、安達（三巻～四巻）

参加者：嶋田（研）・岩瀬・安達・十河（晃）ベンジャミン・クリッサー

中山・古川・嶋田（紫）・久富

記録者：久富

**第一巻**

- 『国家』を読んで・・・
  - ・ さまざまな人物が問題提起をする。
  - ・ 「国家」について述べられていくと思っていたが、いきなり正義が話題となっていたので面食らった。
  - ・ トラシュマコス、〈正義〉よりも〈不正〉のほうが有利であるという考え方は現代にも通じるのではないか。
  
- では「正義」とは？
  - ・ 彼らはある程度「正義」とはこういうものだという認識があつて、それを前提として語っているが、自分たちはそういうものがないという意見が出た。それを受けて、「正義」ではなく「不正」はよく使うが・・・という声が上がった。皆それに同意。「不正」と「正義」が対義語として考えられないという意見も。「不正」が「正義」の対義語だと考えるなら、普段が「正義」でなければ成り立たないのでは。「法」を守ることのみが「正義」なのかという意見が出た。
  
  - ・ 私たちの「正義」は、悪を成敗するイメージ・・・たとえば、「正義」の味方・ヒーローなど。本書とは違うのでは。という意見が出た。「正義」の味方・ヒーローにしても、どこが「正義」なのかという疑問が出た。ウルトラマンは怪獣がいなければ人間にとって邪魔にしかならない・・・悪に対する二極対立？
  
  - ・ プラトンは「正義」とは普遍的で、常にあるものとして語っているのではないかと思うという意見が出た。
  
  - ・ 奴隷を持つことが正義ではないとはどういうことかという疑問に対し、平等ではないからという意見が出た。では平等が「正義」なのか？人権思想では正義になり得ている。現代では人権思想そのものが「正義」となっているのではという意見も。
  
  - ・ 現代の感覚では・・・「正義」という言葉はどこか恥ずかしい、照れくさい感じがするという意見に、ほとんどのメンバーが頷く。

- トラシュマコスの「正義」
  - ・ トラシュマコスの正義は表面的だという意見が出た。社会の中でも、「そうしなければ」「そうあるべき」というもの。具体的なシチュエーションで考えることができるものではないか。反対に、ソクラテスは「正義」そのものを言っているのでは。
  - ・ では、ソクラテスの「正義」とは何か・・・「正義」の定義とは？弱者を守ることや、自分の職業を全うするといった具体的なものならわかるが抽象的な正義になるとよくわからない・・・という意見に対し、抽象的なものがわからなければ具体的なことも実際にはわからないのでは？という意見も。

## 第二巻

- 二巻の感想として・・・
  - ・ 神の存在が大前提にあるのがすごい。
  - ・ 子どもの教育について、現代とはまったく違うという印象。
  - ・ グラウコンの言う「正義」がネガティブすぎる。(ソクラテスに対して反対のことを言うという立場をとるという前提はあるが…) その当時の「正義」の感覚としてはそれが一般的だったのだろうか。
  - ・ 「正義」について、個人の正義を考えていたが、それではわかりにくいのもっと大きな、国家という視点で考えていくという立場には共感できなかった。りんごやみかんなどより小さいものに対象をしばるならわかるが・・・
    - ⇒これに対しては、魂の正義は個人と個人の間で生まれていくもので、個人間を広げていくと自然と国家を語る必要が出てくるのではないかという意見が出た。いづれにせよ、個人と国家が比例対象になっていることがすごいという意見も。
- レジュメ第三項について・・・不正のほうが正義より得とは
  - ・ 授業態度のたとえについて
    - ⇒育ってきた環境に従っていることが結果的に正しいということでは？・・・これは他にもあてはまるのでは。
  - ・ 経済的にも・・・
    - ⇒軍人も、国を守りたいというよりは仕事がないからとも言えるのでは。
  - ・ 旅行のために学校を休む
    - ⇒「法律で決まっていないから」、「罪ではないから」がまかり通る。
- 現代は当たり前前のラインが崩れてきている
  - ソクラテスの時代は“あたり前”のことは法律にする必要はないというスタンス。

- レジュメ第四項について・・・正義の極地は  
⇒「正義の極地は、何ひとつ不正をはたらかないのに、不正であるという評判を受けることだ」とはどういうことか。

- ・ 正義の人が一人と不正の人がいれば、不正の人は正義の人を陥れたりするのでは。

{ 不正の極地の人・・・口がうまい。周りを誘導し、利用する。  
正義の極地の人・・・不正の極地の人が↑のように仕組むので結果としてみじめな扱いになる。

- ・ では不正であることがバレたらどうか？という意見に・・・  
⇒バレない人が不正の人である。たとえバレたとしても、上手に言いくるめることができる人間こそが不正の極地。という意見が出た。

- ・ 正義の極地の人は、周りがすべて敵でも自分の主張をつらぬくもの。  
⇒強制されているものではない

### 第三巻

ここではこの時代の教育について少し触れた。

- 音楽と文芸は最良のものを・・・子どもへの教育に力を注ぐ  
⇒ここまで徹底すると逆に社会の汚いものや厳しさがわからないまま育つのでは？という疑問に対し、子どもは自分の興味のおもむくままにこちらが止めても色々と吸収していくので、そのくらいのほうが丁度よいのではという意見も。

### 第四巻

- 「こまごまとしたことに関する立法・・・」とはどんな立法か  
守護者＝若者 補助者＝軍人  
教育については、ほぼ監視している状態では。  
⇒逆に現代の教育は子どもの無限の可能性を育てるという方針。

- ・ では、ソクラテスの考えは保守的といえるか、という意見に、頭の中からまず始まるからある意味革新的と言えるのではという意見が出た。

- 自分の仕事をこなすことが正義  
・ これは現代では難しいのではという意見が出た。

⇒自分のことは自分でやって責任をとらなければならない。これに加え、現代では自分の専門外のことでもある程度は知っていなければならないから。

- ・ 自分の仕事をする事で国のためになる（軍人など）  
これは、個人が自分のことしか考えない個人主義とは違うのでは。
- ・ 労働の問題でも・・・  
その労働の基準に合わない者は排除。障害者や、怠け者は必要ない。  
現代では労災などの保障があるが・・・

⇒このような国家が理想国家といえるか？という投げかけに、一同苦笑。

- ・ ある意味最高の絶対主義では。
- ・ 国民一人ひとりが哲人でなければ。
- ・ たとえ健康体であってもやる気がなければ（私利私欲で動けば）不要。  
という意見が出、独裁国家になる虞れがあるのではという意見に一同納得。

- ・ この場合の自然な状態とは・・・  
⇒宇宙の秩序の中で自分の本分に勤め、究めていくことではという意見が出た。